

氏名	のぶ　つか　とも　みち 延　塚　知　道	
学位の種類	博士（文学）	
学位記番号	乙第57号	
学位授与の日付	2008年5月7日	
学位授与の要件	学位規程第3条第2項	
学位論文題目	『浄土論註』の思想究明——親鸞の視点から——	
論文審査委員	(主査) 大谷大学教授 博士（文学）[大谷大学]	安　富　信　哉
	(副査) 大谷大学教授 Ph.D. [ハーバード大学]	R. F. Rhodes
	(副査) 大谷大学名誉教授 文学博士 [大谷大学]	鍵　主　良　敬
	(副査) 大谷大学名誉教授・同朋大学特別任用教授 博士（文学）[大谷大学]	神　戸　和　磨

学位請求論文審査要旨

I. 論文の主題

中国北魏の浄土教の仏教者である曇鸞は、北インドの天親（世親, Vasubandhu）の著した『浄土論』（無量寿経優婆塞舎願生偈, 1巻）を註釈して、『浄土論註』（往生論註, 以下『論註』, 2巻）を著した。本書は、わが国でも『智光疏』『往生要集』『安養集』『往生捨因』などの浄土教系の論書でかなり注意されてきたが、それが法然に至り、とくにその門下で重要視されてきた。とりわけ親鸞は、本書を『註論』とも呼んで重視し、本書の加点本（親鸞聖人全集「加点本2」, 真宗聖教全書-, 所収）を遺した。また近世には本書に関する講録が、浄土宗、真宗の各派から宗学者によって多く発刊され、さらに近代になってからは、多様な角度から研究されてきた。仏教学の立場からなされた『論註』研究、たとえば般若思想の立場から本書を見通す研究、北魏仏

教との関連を論ずる研究、あるいは中国思想の視点からなされた『論註』研究、たとえば道教思想との関係から検討する研究、さらに浄土教理史の上からなされた『論註』研究、たとえば『安楽集』への影響を論ずる研究、またそれぞれの宗派との関わりでなされた教義学的立場からの『論註』研究など、多彩である。『論註』の思想は、奥行が深く、それゆえに研究者の関心呼び、『論註』の講義や解説書はもとより、これまで何冊かの研究書や多くの論文が公刊されてきている。

論者は、「現生正定聚——『浄土論註』に依って——」（『真宗教学研究』五、一九八一）を発表して以来、近年の『『浄土論註』講讃——宗祖聖人に導かれて——』（東本願寺出版部、二〇〇六）の著述にも明かなように、一貫して真宗学の立場から、その『論註』の研究を世に問うてきた。それは、親鸞教学が、その根幹において、曇鸞から決定的な影響を受けているということと密接に関わっている。親鸞がいかに曇鸞から大きな影響を受けたかは、たとえば、『浄土論』を著した天親と『論註』の著者である曇鸞に由来する「親鸞」という名を冠して、自らを呼称しているということに端的に表われている。その曇鸞について、親鸞は、「高僧和讃」で、34首もの数の和讃を詠んでいる。龍樹(10首)、天親(10首)、道綽(7首)、善導(26首)、源信(10首)、法然(20首)と較べても圧倒的に詠んだ数が多い。

教学という側面からいうと、親鸞教学の基軸となる二種廻向の思想も『論註』の「往相廻向」と「還相廻向」という思想に由来する。すなわち、親鸞の主著『教行信証』の思想的な骨格は、「教巻」の真宗大綱を示す文に明らかなように、往還二種の本願力廻向によって組織づけられているが、この二種廻向の思想は、もともと『論註』の廻向門の解釈に由来している。曇鸞は、天親の『浄土論』に浄土往生の行として示された「五念門」(礼拜・讃歎・作願・観察・廻向)の第五廻向門を、『論註』のなかで往相と還相、すなわち廻向の往相と廻向の還相の二相に開いた。親鸞は、この廻向の論理を曇鸞に学んで、二種廻向、すなわち往相廻向と還相廻向の二種に開いて、思想的に基礎づけ、これを展開したのである。

以上のことを一例として、曇鸞と親鸞との関係は、様々な論点から論及されてきたが、いまだに十分な解明がなされているとはいえない。たとえば、「親鸞」という曇鸞の名に由来する呼称が、親鸞の生涯のうちのいつ、どのような背景のもとで成立したかということひとつをとってみても、いまだに議論の絶えないところである。とりわけ思想研究において、親鸞教学と曇鸞教学との連関は、近世宗学の講説者、近代の真宗学の教学者により幾度となく論じられてきたし、またこれに関する研究論文も少なくないのであるが、まだ解明されなければならない部分も数多く存在している。そこに『論註』研究の大切な課題が残されている。

このようないくつかの研究課題に対して、論者は、この論文のサブタイトルに「親鸞の視点から」とあるように、とくに『教行信証』の視点から、『論註』の思想的究明に取り組んで、本研究を展開している。その理由について、論者は、本論文の「序」で、

このように親鸞に教えられてみれば、『論註』が難解に見える理由はひとえに仏道観が錯綜しているからではなかろうか。要するに、インドの大乗菩薩道という視点で見れば、『論註』はその註釈書と読めるし、親鸞の視点で見れば凡夫の無上仏道と読める。さらにそれに注意を払わなければ、両者が混同して難解限りないことになる。だから私は、親鸞の視点で『論註』を読み通す方法を探りたいと思う。

と述べている。論者は、とくに凡夫の仏道が成立する基礎を作った歴史的な書として、『論註』の本質を見極め、これまで研究者のあいだで議論が錯綜していた部分の解明に向けて、親鸞の視点に尋ねることをベースとして独自の論を展開している。

Ⅱ. 論文の概要

本論文の構成は、その「目次」によれば以下のようなものである。

序

はじめに

- 一 菩薩道と一乗
- 二 愚禿親鸞の名告り

第一章 親鸞が仰いだ曇鸞

- 一 曇鸞の生存年
- 二 「高僧和讃」の曇鸞伝

第二章 親鸞が仰いだ曇鸞の功績

- 一 曇鸞和讃によって
- 二 三不三信について

第三章 親鸞の『教行信証』と『浄土論註』

- 一 『教行信証』における『浄土論註』の引文数
- 二 『教行信証』制作の事情と『摧邪輪』の批判
- 三 不廻向から本願力廻向へ
- 四 廻向心としての欲生心

第四章 曇鸞の二道釈

- 一 易行道開顕
- 二 五難について
- 三 大乘正定聚

第五章 八番問答

- 一 五逆と謗法
- 二 唯除の目覚め
- 三 三在釈

第六章 五念門

- 一 名号を体とする
- 二 浄土こそ真宗

第七章 浄土の開顕

- 一 清浄功德

- 二 量功德
- 三 妙声功德
- 四 主功德
- 五 眷属功德
- 六 一切所求満足功德

第八章 本願力の開顕

- 一 不虛作住持功德
- 二 覈求其本積

第九章 二種廻向の開顕

- 一 廻向門の往相・還相
- 二 二種類の廻向

論文全体は、「はじめに」を入れれば10章から成るが、内容は、前半部と後半部の二つのパートに分けることができる。

A. 前半部4章（「はじめに」から第三章まで）

論文の「はじめに」から第三章までは、親鸞が仰いだ曇鸞像について、また親鸞が『論註』から学び取った事柄について、「高僧和讃」や『教行信証』を通して尋ねる。

「はじめに」では、『論註』について、菩薩道として表された『浄土論』の立場を一乗の仏道として明かにしたことを述べる。そこに親鸞の曇鸞に対する大きな謝念を見定め、親鸞が、「愚禿親鸞」と名告った由来を尋ねる。

第一章では、「親鸞が仰いだ曇鸞」と題して、曇鸞の生存年と「高僧和讃」の曇鸞讚のうち前半10首および34首目の結讃を通して、親鸞がどのように曇鸞を仰いだか尋ねる。

第二章では、「親鸞が仰いだ曇鸞の功績」と題して、曇鸞讚の後半11首目から33首目まで、すなわち天親の『浄土論』を注釈した曇鸞の数学的な功績を讃えた和讃23首について、その内実を尋ねる。

第三章では、「親鸞の『教行信証』と『浄土論註』」と題して、『教行信証』における『論註』の引文数について、各巻ごとに尋ね、61文として、親鸞教学の「己証」(主体的な証し)のほとんどが曇鸞教学によっているとする。また真宗の教一行一信一証という仏道大系の根底となる本願力回向の感得について、法然の「不廻向」の思想に示唆され、さらにこれを根源化したことを尋ねる。

B. 後半部5章(第四章から第九章まで)

第四章から第九章までは、『論註』の思想内容の究明である。

第四章は、「曇鸞の二道釈」と題して、その難易二道判について尋ねる。すなわち『論註』の冒頭で、曇鸞は、天親の『浄土論』によってではなく、龍樹の『十住毘婆沙論』によって、仏道に難行道と易行道があるというが、論者は、難行道に択んで本願力による仏道を説いたこの二道釈は、曇鸞の立った仏道の宣言であるとし、ここに「凡夫の仏道」という『論註』の基本的な仏道観を見定める。

第五章は、「八番問答」と題して、『論註』に示された曇鸞の機(人間)の自覚について尋ねる。八番問答とは、『浄土論』の偈文の結び(廻向章)の句である「普共諸衆生」(普く衆生と共に)の語について、八番の問答を立てて解釈した部分であるが、論者は、その内実は、自力無効の目覚めを明らかにしているという。

このように、『論註』上巻(総説分)冒頭の「二道釈」と上巻末尾の「八番問答」を通して、『論註』に、『浄土論』にはない曇鸞独自の仏道観をみて、曇鸞は、大乘菩薩道として表されている『浄土論』の全体を「凡夫の仏道」に換骨奪胎したという。

この「二道釈」と「八番問答」に挟まれて、『浄土論』の注釈部分がある。以下の論述は、凡夫の仏道という観点から、その注釈部分について考察する。

第六章は、「五念門」と題して、『浄土論』で浄土の行として説かれる

礼拝・讃嘆・作願・観察・回向の五つの行業（五念門）の意義について尋ねる。論者は、曇鸞が、五念門のうち、称名念仏を説く讃嘆門に中心を見定め、凡夫の仏道という観点を明確にしていることを確かめる。

以下、3章にわたって、『論註』において、いかに凡夫の仏道が開顕されたかということについて考察する。この3章ともに「開顕」という語を軸とする。

まず第七章は、「浄土の開顕」と題して論述される。『浄土論』では、浄土の莊嚴として二十九種の莊嚴功德が説かれているが、本章では、浄土を開顕するものとして、親鸞が目した六種の功德（1. 清浄功德, 2. 量功德, 3. 妙声功德, 4. 主功德, 5. 眷属功德, 6. 一切所求満足功德）を取り上げ、『論註』の釈義に従って、如来の自利利他が実現されている浄土の莊嚴功德こそが凡夫の願生者の自利利他を満足してくれる世界であるとし、浄土が開顕された意義について考察する。

つぎに第八章は、「本願力の開顕」と題して論述される。本章では、とくに本願の仏道の根柢となる上下巻の「不虛作住持功德」と下巻「利行満足章」の「覈求其本釈」に注意する。ここにおいて、曇鸞の仏道観が本願を基軸にし、そこに凡夫の仏道が開顕される端緒があることを確かめる。

最後の第九章は、「二種廻向の開顕」と題して論述される。曇鸞は、回心の体験に立って『浄土論』を身読した。曇鸞は、どこまでも菩薩である天親の教化に聞くという凡夫の立場から、『浄土論』の廻向門について、往相（此土）と還相（彼土）の二相に開いたが、この曇鸞の開顕において、やがて二種廻向という親鸞独自の廻向論へと連なる観点が提出されたことを尋ねる。

Ⅲ. 論文審査結果の概要

本論文において、筆者は、曇鸞の『論註』を究明するテキストとして取り上げた。一つのテキストは、時代時代に影響を与えて、再解釈されるが、ど

の視点でテキストを見ていくか。視点をはっきりとさせなければテキストは読めない。親鸞は、自ら帰した本願の視点から『論註』を解釈したが、論者は、親鸞の学的態度を規矩として、自ら『論註』に向き合った。「I. 論文の主題」で引用したように、論者は本論文で、「親鸞の視点で『論註』を読み通す」という方法を採用している。この方法は、近世の宗学、近代の真宗学における『論註』の読み方として徹底していなかったところであり、本論文は、親鸞の解釈学的方法に改めて目を見開かせるものと思われる。以下、その論述に沿いながら、本論文の論点とその意義を尋ねてみたい。

「はじめに」では、『論註』が、菩薩道として表された『浄土論』の立場を転じて、一乗の仏道として明かにしたことを述べる。従来、『論註』を菩薩道の論書としてみるという見解がよくみられるが、論者は、親鸞の視点に導かれ、凡夫の無上仏道、すなわち一乗の仏道として本書をみる。この視点に明解さがある。また曇鸞の一字をとった「愚禿親鸞」の名告りを、近年、三十三歳の綽空からの改名にこれをみる学者が多いが、論者は、これに反論して、吉水時代の『観経・弥陀経集註』の『論註』の引文数の僅少であることなどをその証左として、親鸞の改名期を流罪後にみている。これは、さらなる多少の検討が必要だが、支持できる見解である。

第一章「親鸞が仰いだ曇鸞」では、曇鸞の生存年について言及し、その不確定性を改めて確認し、通例の生没年代の表記に問題が残ることを示す。また「高僧和讃」の曇鸞讃を通して、親鸞の曇鸞観が、一般的な伝記の讃詠と全くことなり、『大経』の願生浄土の仏道を歩んだ人と見定めていることを確認する。この論者の確認点は、『論註』をみる視点を明瞭にするものであるとともに、本論文の全体的な基調ともなっている。

第二章「親鸞が仰いだ曇鸞の功績」では「高僧和讃」の曇鸞讃を取り上げるが、曇鸞が願生者の五念門の廻向行を二種相に開いているのに対して、曇鸞が、これに示唆されて、本願の行信を成り立たせる根源的な如来の働きを二種の廻向と説いていることを見定める。すなわち親鸞における廻向の了解が、曇鸞のそれ(一廻向二種相)とは異なり、完全に二つの廻向(二種廻向)

の了解になっていることを確かめる。この親鸞の廻向了解は、近世では、「往相還相と云ふは、衆生の方にあることなり。(中略) 往還二相は衆生に約して名を得るなり」(香月院深励『教行信証講義』「真宗大綱」といわれるように、廻向の主体を衆生(願生者)の側に置く曇鸞の了解そのままに受け入れられ、それが近代に至るまで親鸞の廻向了解として通念的に受け継がれている。論者は、この伝統的な了解に立たない親鸞の廻向の了解の特質を本章で確かめる(これについては第九章で本格的に論ずる)。さらに『教行信証』『信巻』の三一問答が開かれてくる源泉について、道綽の三不三信の教えに導かれて、曇鸞の三不信と善導の三心積の根源に本願の三心を読みとったことを推究する。この道綽に導かれたという視点は、次章でも再検討されるが、従来には見られなかった見解であり、本論文の大きな功績である。

第三章「親鸞の『教行信証』と『浄土論註』」では、『教行信証』における『論註』の引文数について、61文(御自釈18文、直接引文43文)とする。この引用回数の算定については、易行院法海は『浄土論講義』で28文とする。これは、各論者の視点によっても異なると思われる。また法然の不廻向の立場を、親鸞が本願力廻向の立場に根源化して、明恵の『摧邪輪』の論難に応えたという視点は、『教行信証』、とりわけ三一問答の開頭の意義を確認するものとして首肯される。

第四章「曇鸞の二道積」と第五章「八番問答」は、『浄土論』の注釈から外れた部分であるが、二道積は曇鸞の立った仏道の宣言であり、八番問答は、その仏道に立った曇鸞の人間観を表すものであるとする。ここに、曇鸞は、大乘菩薩道として表されている『浄土論』の全体を「凡夫の仏道」に換骨奪胎したという。これは、本論文の『論註』観の基調を明瞭に確認するものである。とりわけ、二道積について尋ねるなかで、龍樹の『十住毘婆沙論』に導かれた曇鸞が、『浄土輪』にはない、阿毘跋致(3回)、正定聚(10回)、不退転(3回)の語を多く用いることに注意し、これによって、本願力によって実現する正定聚を明確にしようとしているという指摘は、『論註』の性格をよく表すものと窺われる。ただ、論述の展開のなかで、『大経』に「唯除

の文」が出てくる背景に、仏像を破壊するイスラムのような異教徒の存在があったかもしれないとの示唆は、さらに検討が必要であろう。

第六章「五念門」では、天親が五念門を菩薩の起行として説いているのに対して、曇鸞が、五念配釈(願偈全体を五念門により組織的にみること)によって、『願生偈』の第一行四句は、礼拝・讃嘆・作願の三念門に、第三行以下の二十一行は願察門に、最後の一行四句は廻向門に、それぞれ配当するが、五念門の中心的意義を念仏(讃嘆門)として確かめる。とりわけ不虛作住持功德を手懸かりに、浄土の功德こそが、一心願生の仏道を成り立たせる根拠であると見定め、『論註』の全体に、大乘菩薩道から凡夫往生の念仏道へ展開させようとしているとして、その苦勞を辿る。本章も、凡夫の仏道を明かにした『論註』の基調を確認するものである。

第七章「浄土の開顕」では、『浄土論』の二十九種莊嚴功德の中で、親鸞が『教行信証』で注目した九種の莊嚴功德のうち、六種の莊嚴功德を取り上げ、『論註』の釈義に従って、総相としての清浄功德以下、順次その意義を尋ねる(ただ、願心莊嚴の問題について、本章の論述の前提として、ここで言及される必要があったのではないか)。論者は、教一行一信一証が浄土の真宗という真実の仏道に成るか否かは、その証果が涅槃に直結するかしらないかによるのであり、そこに『教行信証』に「真仏土卷」を開顕しなければならない最大の理由があるとする。この論点は、「真仏土卷」が、前四卷の付章ではないということを確認するもので、「真仏土卷」を前四卷の付録のようにみる従来の通念を破る、大切な視点を提示したものと受けとめられる。

第八章「本願力の開顕」では、「不虛作住持功德」と「利行満足章」(覈求其本釈)に注意する。論者は、「不虛作住持功德」について、この偈文は、人間の歴史の中で、『大経』の真理性をあかした歴史的証文という重要な意義を持ち、他力の仏道への転換を明かにしているという。さらに覈求其本釈、そしてそこに展開する他利利他の深義に触れ、それは、五念、五功德(近門・大会衆門・宅門・屋門=入の自利行、園林遊戯地門=出の利他行)の行が、衆生の行でありつつ、自力による行ではなく、本願の道理に住持されていることを

確かめ直すものであると指摘する。いずれも本願力に実現される凡夫の仏道を開顕する重要な文として取り上げられる。

第九章「二種廻向の開顕」では、自ら帰依した天親の『浄土論』の教えを徹底して聞思する曇鸞が、その学びの中から廻向の二相を開いたと指摘する。論者は、『論』の善巧撰化章の文と「出第五門」の文とにその根拠があるとし、前者に廻向行を往相、還相に分ける知見を得、後者に還相を確かめたとする。すなわち師教の天親の聞思において廻向の二相（往相＝此土、還相＝彼土）が開かれたという。曇鸞の宗教的体験が廻向の二種相を開かしたとの指摘は、従来思想的展開として見られてきた『論』と『論註』の関係を、瑞々しい宗教的呼应性の中に把えるもので、思想の書として分析するに先立ち、信仰の書として『論註』を読み込んできた著者の研鑽の独壇場となっている印象が強い。またこの点をさらに徹底して、曇鸞が明らかにした廻向の往相・還相（一廻向二種相）を、二種類の廻向（二種廻向）へと進めたのが親鸞の二種廻向の了解であるという。この指摘は、寺川俊昭氏の所説（『親鸞の信のダイナミックス』）をさらに深く受けとめた論者の『論註』熟読の成果を示している。

以上のように、本論文は、『浄土論註』の思想を、親鸞の導きによって、「凡夫の無上仏道の開顕」という視座に立って究明し、『論註』を讀解する様々な視点を、改めて私たちに提示している。長年の研究の蓄積による本論文は、『論註』の讀みの深さにおいて鋭く、また論述の展開において、筋の明解な論考である。この明解な視点に立って、論文全体は、読みやすく、力感にあふれている。本論文に示された様々な知見は、宗学の伝統に根ざす「定説」に捉われず、筆者の『論註』体験を基点とするもので、これからの『論註』研究に大きな一石を投じると思われる。

IV. 最終試験および語学試験の結果

審査に必要とされる最終試験および語学試験については、審査委員全員により2008年3月14日に行った。その結果、審査員一同一致して、延塚知道に大谷大学博士（文学）の学位を授与する事が適当と判断した。